

●アーバンシステム環境通信の主な内容

発行月	タイトル	主な内容
2006年2月	ダイビング	世界中で死滅するサンゴの現状と沖縄での移植事業
3月	環境落語	環境問題をテーマにする環境落語の予告
4月	ロハス	「健康的な暮らし」などロハスを6つのキーワードで説明
6月	世界環境デー	世界環境デーの説明と日本における活動の紹介
7月	環境落語	7月に開催され、盛況に終わった環境落語の紹介
9月	ペットボトルtoペットボトル	ペットボトルからペットボトルを再生するケミカルリサイクルの説明
9月	エコファンド	エコファンドの説明、国内の反響と今後の展望
10月	琵琶湖のバイオマス	琵琶湖で実施されている外来魚を利用したバイオマス事業の紹介
11月	青島・日本環境技術商談会	中国・青島で開催された日中の環境技術商談会の説明
12月	「木づかい運動」のすすめ	林野庁が進めるCO ₂ を十分に吸収する森林づくりの紹介



「琵琶湖のバイオマス」や「木づかい運動」のすすめ」などの号の環境通信も従業員が興味を持つように編集されている

べてCO₂を吸収しやすい森林作りを紹介している。

「環境通信」は1年ほど前から、一部の得意先などにも送り好評を得ている。2006年9月号でエコファンドを取り扱った「環境通信」を送った時には、不動産関係の主力取引先の部長から励ましの連絡があったという。

同社の小柴卓人社長は、「職人気質の従業員が多く、環境意識を向上させるには苦勞してきた。しかし、最近では従業員が取引先から環境への取り組みを誉められるケースが増えている。環境教育を継続していることで従業員の意識が向上している」と話す。

この数年で急速に広まった環境eラーニングでも、漠然と環境教育のコンテンツを作成している企業が多い。この分野でも何を学んでほしいかを明確にすると、従業員の反応が良くなる。

NTTデータは、グループ会社の派遣社員まで含めるとISO14001の受講対象者が約2万3000人になる。だが、環境eラーニングで99%という高い受講率を記録している。ISO事務局が受講の依頼を何度もするなど地道な取り組みをする一方で、教育コンテンツの良さが従業員に受け入れられている。

2006年度の環境eラーニングは、前年度のeラーニングのアンケート結果やISO14001の内部監査の指摘を参考に作成した。同グループの環境活動の取り組みのほかには、廃棄物処理の法令違反リスクと環境に配慮したシステムの開発に絞ったコンテンツになっている。

マニフェストを具体的に説明

対象を絞った分だけ具体的な内容になっており、従業員の評判も良い。例えば、廃棄物管理のリスクのページは、「システムの更改時の廃棄物管理」というケーススタディーを紹介しながら、マニフェスト伝票の重要性が示されている。

その次のページでは、このケースにおけるリスクのポイントを示している。マニフェスト伝票の管理義務違反となった場合にどんな処罰が下

るか、そのような事態を未然に防ぐには、どんな運用をすべきかを紹介している。

NTTデータ環境保護推進室の原田彩子氏は、「今回、eラーニングの作成に当たっては、前年に起きた運用上の課題にポイントを絞ったことが93%の受講者の満足度につながった要因の1つだと思う。来年からは、これまでより一人ひとりのパフォーマンスが向上するようなコンテンツを作成したい」と話す。

環境教育は、ISO事務局の意欲と受け手である従業員の意識の落差が大きな分野である。「環境教育を受けるのは、どちらかと言えば面倒くさい」という従業員の心理を前提に何をすべきかを検討するとよい。今回のケースに共通するのは、こうした従業員の抵抗感をうまく取り除いている点である。

！ここがポイント

- 1.何を教えたいかという目標を明確にする
- 2.短時間でも継続して取り組む
- 3.eラーニングは内容を絞り具体的に